

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1. 2.				
(著書(和文)) 1. コンディショニングの科学	共著	1995年	朝倉書店	武道としての側面とトップクラスに位置する剣道選手のコンディショニングの実際を踏まえて、剣道における新たな試みとして、筑波大学剣道部における試合前のコンディショニングを紹介した。歴史的に精神面の充実を重視している剣道においては、選手の心理状態からコンディショニングの変化を捉え、より望ましい方向に軌道修正するというアプローチは、実際の競技現場において有用性が高く極めて現実的な方法であると結論した。 小林寛道、西嶋尚彦、小澤聡、和久貴洋ほか26名 総頁223 担当209-219
2. “身体教育のアスペクト”	共著	1998年	道和書院	オーバートレーニングの一般概念を踏まえた上で、オーバートレーニングがスポーツ界の重要課題であることを示し、その発生要因、症状予防法を紹介した。予防法として、自覚的コンディショニングチェックと生理学的指標によるコンディショニングチェック、心理学的指標となるPOMSを紹介した。それらの指標を複数で用いながら個々の選手について検討を行い、一早く兆候を見つけることが、競技現場におけるオーバートレーニングの予防策であると結論した。 佐藤臣彦、前林清和、横山勝彦、小澤聡、和久貴洋ほか31名 総頁306 担当222-233
3. 健康スポーツ指導教本Ⅰ-体育科学とスポーツ文化-	共著	2004年4月	体育教育出版会	体育学の人文・社会科学、自然科学双方の幅広い研究領域について執筆されている。その中で、「スポーツと水分補給」について執筆した。スポーツ活動中における熱中症発症の現状、水分補給が身体に及ぼす影響として、体温上昇の抑制、心負担の軽減について説明した。さらに、運動中に適した水分補給の方法として、その成分、補給量、補給タイミングなどについて説明し、スポーツ活動中における熱中症予防策を紹介した。

4. 日米文化交流史 ― 彼らが変えたものと 残したもの―	共著	2005年9月	学陽書房	日本国内における戦前・中・後の剣道の発展と剣道を通じた日米の交流について述べた。戦前における剣道を通じた日米の交流には、2人の人物、森寅雄および中村藤吉が大きな役割を果たした。また、その背景には排日運動が存在していた。戦後における交流という意味においては、日米間で剣道についての考え方の相違により、剣道が禁止され再び解禁されるまでの経緯を説明した。そして、米国における剣道の発展に寄与した森寅雄らの思想は戦後日本でも引き継がれ、世界剣道連盟の発足、世界大会の開催へとつながった。 波多野勝，柳田美恵子，井上徹，<u>小澤聡</u>，依田泉，飯森明子 総頁216 担当頁 第4章146-180
5. 剣道医学Q & A (第2版)	共著	2006年10月	財団法人全日本剣道連盟	剣道選手における「サポーターの基礎知識」として、傷害の種類とそれに応じたサポーターの種類を説明した。さらに、テーピングとの相違点と使用上の注意をスポーツ医科学的に説明した。 また、剣道選手における「オーバートレーニング症候群」として、その基礎知識として、原因、症状、対策について概要を説明した。 朝日茂樹，池澤清豪，伊藤伸，伊藤元明，伊藤保憲，今村幹雄，<u>小澤聡</u>，佐伯実など61名 総頁255 担当頁36-37，44-45
6. 強くなるための剣道 コンディショニング & トレーニング	共著	2008年4月	体育とスポーツ出版社	剣道の競技力や障害予防に関する解剖学的解説やテーピング方法（足底部や踵部など），トレーニング方法（コーディネーショントレーニングの概論及び具体例），ストレッチ方法（腰部），食事法（カーボローディング），水分補給法（水分補給による熱中症予防，競技力工場のためのドリンク），コンディショニング方法などについて解説。1章，2章，3章，4章，5章の各節でそれぞれについて記載した。 <u>小澤聡</u>，今有礼，斎藤実，菅生貴之，高橋健太郎，土屋裕睦，藤野英明，森聡子，和久貴洋，和久美紀 総頁327，担当頁19-30，174-177，188-216，231-237，250-254，260-267，268-271，276-280276-280
7. 心と体の健康・スポーツ	共著	2019年4月	大修館書店	スポーツ活動中における熱中症予防に関すること スポーツ活動中における水分補給に関すること

8	水戸東武館150年誌	共著	2024年1月	(一財) 水戸東武館	水戸における町道場の150年の歴史について振り返る。創始者の小澤寅吉，日本剣道界の父ともいわれる内藤高治などの活躍をきさい。また，これまでの活動として北辰一刀流剣術の復活や伝播，少年剣道における長年の貢献について記載した。 小澤智，高山陽好，野澤龍之，上田忠夫，清水修，田中栄一，吉田信二，兼子勝善，山本雅文， <u>小澤聡</u> 担当P152
	(学術論文(欧文))				
	1.				
	2.				
	(学術論文(和文))				
	1. 大学剣道選手の寒稽古中におけるPOMSの変動に行動パターンが及ぼす影響	共著	1997年	”身体運動文化研究第4巻第1号 Pp. 19-31” (査読有り)	本研究では，剣道選手のコンディショニングの推移に行動パターンが影響を及ぼしているか否かを検討するために，非常に激しい稽古を行う寒稽古におけるPOMSの変動を観察した。その結果，行動パターンの下位尺度によって変動の様式が異なった。従って，選手の行動パターンを考慮した上でPOMSを用いると，選手のコンディショニングをより正確に把握できる可能性が考えられた。 <u>小澤聡</u> ，松田光生 総頁19-31 担当19-31
	2. 剣道選手のコンディショニングに関する研究 -コンディショニング把握のための指標と競技現場におけるコンディショニング管理の方法の検討-	共著	1993年	”武道学研究第26巻第2号 Pp. 12-24” (査読有り)	本研究は，大学学剣道選手のコンディショニングを把握するための指標と競技現場におけるコンディショニングの管理方法について検討した。その結果，5段階指標を用いた選手の己採点によるコンディショニング評価は，競技現場において有効であり，その管理にはスポーツ医科学的な知識を持った健康管理組織の介入が必要と考えられた。 和久貴洋，河野一郎，小林亜希子， <u>小澤聡</u> ，香田郡秀，中村充，吉谷修，武藤健一郎，高山基紀，佐藤成明 総頁12-24 担当分類困難

3. 高温環境下における 剣道の稽古着と 防具の着用が運動時 の体温に及ぼす影響	共著	1993年	”スポーツ産業学研究第4巻第1号 Pp. 19-27 (査読有り)	剣道の稽古着と防具の着用の有無が、高温環境下における運動時の体温に及ぼす影響を検討するために、高温環境下で短パンツのみの運動と剣道の稽古着と防具を着用しての運動を比較した。その結果、2つの実験間で体重、ヘマトクリット、血清総蛋白などに差は認められなかったものの、運動中の鼓膜温と皮膚温において、稽古着を着用した場合は着用していない場合と比較して有意に高値を示した。高温環境下における剣道の稽古着と防具の着用は、脱水及び循環系の反応に影響を及ぼさない程度の運動でも、運動時の熱放散を妨げ、体温を著しく上昇させることが考えられた。 和久貴洋，斎藤実，<u>小澤聡</u>，松田光生 総頁7頁 担当分類困難
4. コンディションと フィットネスの変動 から みた剣道の寒稽古の 特性	共著	1996年	”武道学研究第28巻 第3号 Pp. 10-22” (査読有り)	剣道には重要なトレーニング方法として寒稽古がある。その寒稽古中のコンディションの推移と寒稽古前後の選手の最大酸素摂取量の変動から剣道における寒稽古の特について検討した。その結果、寒稽古中に著しい持久力の低下が生じた選手の中には、寒稽古後2日間の睡眠パターンが不適切な選手が見られた。したがって、寒稽古後の生活パターンなどが、持久力の変動に関与しており、寒稽古中あるいは後の生活パターンの管理が重要であることが考えられた。 和久貴洋，河野一郎，<u>小澤聡</u>，斎藤実，柳川真美，藤野英明，香田郡秀，佐藤成明 総頁13頁 担当分類困難
5. 剣道の稽古着と防具 が高温環境下 の運動時における体 温と脱水に及ぼす影 響	共著	1998年	”スポーツ産業学研究 Vol. 8No. 1Pp. 1-9” (査読有り)	先行研究では、剣道の稽古着と防具の着用が体温を著しく上昇させることを示したが、重量によるエネルギー消費量についてまで検討できなかった。今回は稽古着と防具の重量がエネルギー消費量に影響を及ぼし得る運動負荷としてトレッドミル運動負荷を実施し、体温の上昇と脱水について検討することを目的とした。その結果、稽古着と防具を着用してのトレッドミル運動によって、体温だけではなく体重やバゾプレッシン濃度も著しく上昇した。その原因として、防具の重量が影響していることが示唆され、その改良の必要性が考えられた。 総頁9 担当分類困難 斎藤実，和久貴洋，藤野英明，柳川真美，<u>小澤聡</u>，松田光生

6. 剣道における水分摂取のあり方に関する研究 -大学剣道部における夏期強化合宿時の水分摂取の実態から-	共著	1999年	“身体運動文化研究 Vol. 6No. 3 Pp. 83-92” (査読有り)	夏期強化合宿中における大学剣道部の夏期稽古における水分摂取の特性について検討した。その結果、水分摂取率は40.1%であり、他の競技と比較すると低い傾向がえた。また、学年別の検討では低学年ほど摂取率が低い傾向が認められた。これらの結果から、剣道の夏期の稽古時の水分摂取が熱中症予防という観点からは、不十分であることが示唆され、稽古前の水分摂取、休憩回数や時間などを考慮する必要が考えられた。 小澤聡, 和久貴洋, 斎藤実, 瀬口典子, 香田郡秀, 佐藤成明 総頁9 担当分類困難
7. 剣道初心者における「送り足」習得後の「踏み込み動作」への応用可能性に関する実践的検討	共著	2012年	武道学研究 44 巻 3号 p. 107-119 (査読有り)	大学における剣道授業を履修した運動能力の高い男子大学生を対象とし、「送り足」による打突動作の学習後に短時間の「踏み込み足」による打突練習を実施した際の技能評価や動作解析を行い、実際の授業場面における剣道学習者の「送り足」習得後の「踏み込み動作」への応用度について検討した。 有田祐二, , 直原幹, 木塚朝博, 鍋山隆弘, 廣野準一, 小澤聡, 岩本貴光, 香田郡秀 総頁12 担当分類困難
(紀要論文)				
1. “剣道におけるスポーツ生涯の縦断的研究 -傷害発生と稽古時間の関連-”	共著	1993年	東京大学教養学部体育学紀要第28号 Pp. 45-51	スポーツ場面で多く見られる傷害の発生を把握するために、大学剣道部で発生した傷害と稽古時間との関係を検討した。その結果、傷害発生は年間スケジュールとの関連が認められた。また、傷害発生件数と稽古時間の間に重回帰式が得られた。 和久貴洋, 小澤聡 総頁7 担当分類困難
2. 剣道競技における試合分析の試み	単著	2005年3月	常磐大学コミュニティ振興学部紀要 Pp225-229	剣道に於ける打突パターンを知ることは、剣道の上達には欠かせないが、それらについての報告はあまり見られない。したがって、高等学校総合体育大会における剣道の試合をビデオにて撮影し、その有効打突を得る過程のパターン分析を行った。 小澤聡 総頁5

3. 高等学校の剣道強化合宿時におけるスポーツ医・科学的サポートの実践	共著	2006年12月	専修大学体育研究紀要13-18	多くの高等学校において夏期強化合宿が実施されている。近年、その際におけるスポーツ医科学的なサポートの重要性が指摘されている。一方、剣道は日本古来の伝統的なトレーニング法を継続しており、スポーツ医科学的なサポートの導入が遅れている。我々は、茨城県の高등학교連盟剣道専門部の強化合宿において1997からスポーツ医科学的サポートを実施してきた。剣道におけるそれらの活動と効果について報告し、今後の剣道における活動の一助となることを狙った。 斎藤実、小澤聡 総頁6 担当分類困難
4. 総合型地域スポーツクラブにおけるクラブ運営の取り組み—ふくのスポーツクラブにおける指導者研修プログラム—	共著	2008年3月	専修大学体育研究紀要31号p17-24	我々が実施した一連の研修プログラム（指導者養成プログラム）によって、総合型地域スポーツクラブの弱点の解決策となり得ると示した。とくに、組織横断的に実施されたスポーツテストというイベントは有効であった。 斎藤実、小澤聡、荒井宏和、守屋志保 総頁8 担当分類困難
5. 中高齢者の体力因子構造の検討	共著	2009年3月	茨城大学教育学部紀要57号p. 113 -120	本研究では地域在宅の中高齢者を対象に、新体力テスト項目と基本的身体特性との関連について検討した。結果、中高齢者においてはテスト項目において複合的な体力要素が含まれていることが示された。たとえば、握力は身長に加え体重との関連が高く、体格の要素が強いことを考慮に入れる必要があると考えられた。また、男性の握力には体格が、女性の握力には体力が強く影響するなど、男女差が認められた。体力テストのフィードバックの際にはこれらの点について配慮する必要があると思われる。
6. 競技スポーツにおけるコンディション評価に関する研究—統計解析手法の適用とその有効性の検証	共著	2009年3月	専修大学体育研究紀要32号p17-26	競技現場で頻繁に用いられる自覚的コンディション評価法に、単一事例研究法による統計退席手法の適用を試みた。ランダマイゼーション検定の結果、各選手において鍛錬期に見られたコンディションが有意に推移した因子が試合時のパフォーマンスに関係していることが示された。
7. 剣道における足底部裂傷予防のための保護テープの開発	共著	2010年12月	専修大学体育研究紀要34号p19-26	裸足競技における測定部裂傷予防のための保護テープ開発を目的とし、剣道におけるその現状調査と、裂傷の保護・予防のためのサンプルテープを製作した。使用感覚や方法については従来以上の評価を得たが、添付しての運動によって剥がれてしまう事例もあり、個人差に対応できる検討が必要であると結論づけられた。

8. アナログン動作によるトレーニングが開脚跳びの姿勢に及ぼす影響	共著	2017年3月	常磐大学教職実践研究	開脚跳びができない女子大学生を対象に、開脚跳びの成功に有効となるアナログンのトレーニングとして「うさぎ跳び」および「跳び出し」が開脚跳びにどのような影響を及ぼすのか2次元動作解析などを用いて検討した。アナログンのトレーニングが開脚跳びの姿勢・動作の変化に影響を及ぼすことが示唆された。
9. 保育現場において有効な幼児運動能力評価法に関する一考察	単著	2022年3月	常磐大学教職実践研究 第6号 p3-12	幼稚園教育要領の領域「健康」を踏まえて、幼児教育機関における幼児の健康を育むため、どのような評価をすべきか、評価をどのように活かすべきかについて論述した。論文の中では、幼児の運動能力評価に関する文部科学省の発行物および先行研究を概観し、その重要性を確認した。さらに、そのうえで、2種類の評価法を比較し、幼児教育機関において運動能力を評価・活用するための適した方法を検討した。
(辞書・翻訳書等) 1. 2. 3. 4.				
(報告書・会報等) 「ジュニア剣士のためのアンチドーピング」 1. グ道場」動画作成 (制作・編集)	共著	2022年5月	全日本剣道連盟公式 youtubeチャンネル	小中学生を対象にしたアンチ・ドーピングマニュアルを動画形式で制作し、電子メディア(youtube)を通じて公開した。
1. ジュニア剣士のためのアンチ・ドーピング道場(選手インタビュー編) 動画作成(制作・編集)	共著	2022年12月	全日本剣道連盟公式 youtubeチャンネル	小中学生を対象にしたアンチ・ドーピングマニュアルの選手インタビュー編を動画形式で制作し、電子メディア(youtube)を通じて公開した。
3. ドーピング検査の低年齢化	単著	2010年8月	月間剣窓 2010年8月号	ドーピング検査の低年齢化について、アメリカのニュースを事例に説明。日本でも高校総体ではじめてドーピング検査が実施されることを紹介。今後のドーピング検査に対する心構えを説いた。p11
4. ドーピングを起こさないために	単著	2014年8月	月刊剣窓 2014年8月号	ドーピングを起こさないためのツールとしてGlobal DR0を紹介し、その使用方法について解説した。p12
5. サプリメントは自己責任	単著	2016年8月	月刊剣窓 2016年8月号	国内で初めて、サプリメントからアンチ・ドーピング禁止物質が検出されたことを紹介し、サプリメント摂取のリスクについて解説した。p11

6. 他者への薬物混入によるドーピング違反	単著	2015年5月	月刊剣窓 2018年5月号	国内では初めてと考えられる、カヌー競技における他者を陥れる行為でドーピング違反となったケースを紹介した。本件を通じて、自分のドリンクおよびスポーツ用具に対する管理徹底の必要性を説いた。p10
7. アンチ・ドーピング規則違反Q&A	単著	2020年5月	月間剣窓 2022年5月号	アンチ・ドーピング規則違反の1つである「禁止物質・禁止方法の使用または使用を企てること」についてQ&A形式で3項もう設けて解説した。p11
8. 東京オリンピック・パラリンピックを振り返る	単著	2021年11月	月刊剣窓 2021年11月号	東京オリンピック・パラリンピックにおけるペットボトルの飲み残し問題を紹介。最新のドーピング検査手法である「乾燥血液スポット検査」が導入されたことで、血液採集によるスポーツスキルへの危険性について解説した。p11
9. 剣道界におけるアンチ・ドーピングに関する意識の状況	単著	2023年8月	月刊剣窓 2023年8月号	剣道界におけるアンチ・ドーピングに関する意識の状況として、全日本剣道連盟が実施したアンケート結果を紹介した。p12
10. スポーツ愛好家における医薬品の不適切使用	単著	2025年2月	月刊剣窓 2025年2月号	これまで、アスリートだけが行うと考えられてきたドーピングだが、筋力トレーニング愛好家におけるドーピングの禁止物質を含む筋肉増強剤の乱用が広がっていることを紹介し、剣道愛好家については良識ある行動を求めた。p11
11. 変化するアンチ・ドーピング教育	単著	2026年4月	月刊剣窓 2025年5月号	WADAから、「教育に関する国際基準（ISE）」が発効された。これにより、アンチ・ドーピング教育は単なる規則遵守のための知識提供から、スポーツの価値を基盤とした“人づくり”へと大きく舵を切ることになった。 日本では2023年度よりクリーンスポーツ教育プログラムが本格的に始動し、スポーツを通してどのような価値を体現し、社会にどのような影響を与える存在になるのかという、本質的な問いに向き合う教育へ移行している。p11
(国際学会発表)				
1.				
2.				
3.				
4.				

(国内学会発表)				
1. 剣道におけるスポーツ傷害(Ⅱ) -メディカルチェックを用いた傷害発生要因の検討-	共著	1993年	武道学研究第26巻別冊P40	大学剣道選手における腰部、足関節及びアキレス腱部のスポーツ障害の発生要因を継続的に行ったメディカルチェックの結果から検討した。腰部傷害は腰部後屈の制限の有無、足関節部傷害は足関節不安定性、アキレス腱部傷害はアキレス腱圧痛の有無がこれらの傷害の発生の誘因として考えられた。また、継続的なメディカルチェックにより傷害発生の危険性を評価することは重要であり、それによって傷害への対策を講じ、傷害発生予防も可能であると考えられた。
2. 剣道におけるスポーツ傷害(Ⅳ) -大学剣道選手における傷害発生と稽古時間-	共著	1994年	剣道学研究第27巻別冊P48	大学剣道部における稽古と傷害の実態を縦断的に把握するとともに、稽古時間と傷害の発生の関連について明らかにした。その結果、傷害発生は年間スケジュールとの関連が認められた。また、傷害発生件数と稽古時間の間には、重回帰式が得られた。
3. 剣道におけるスポーツ傷害(Ⅴ) -大学剣道選手における簡易フィットネステストの有用性-	共著	1995年	剣道学研究第28巻別冊P42	大学剣道選手の腹部、下腿部、足底部筋力を簡易テストを用いて評価し、それらの成績について過去に腰部、下腿部、足底部に傷害を経験した選手と経験のない選手で比較を行った。女子選手において脚伸展・屈曲腹筋持久力テストおよびタオルギャザーテストにおいて傷害経験者と非経験者の間に有意な差が認められた。従ってこれらのテストは、腰部や足底部の傷害予防や受傷後のリハビリなどのためのトレーニングの目安となり得ることが考えられ、競技現場での傷害管理におけるこれら簡易フィットネステストの有用性が示唆された。
4. POMSを用いた剣道選手のコンディション評価	共著	1996年	身体運動文化学会(第1回記念大会) Pp. 8-10	剣道選手のコンディションの推移に行動パターンが影響を及ぼしているか否かを検討するために、非常に激しい稽古を行う寒稽古におけるPOMSの変動を観察した。その結果、行動パターンの下位尺度によって変動の様式が異なった。従って、選手の行動パターンを考慮した上でPOMSを用いると、選手のコンディションをより正確に把握できる可能性が考えられた。

5. 剣道の夏季強化合宿時における水分摂取の実態	共著	1998年	トレーニング科学	剣道の夏期強化合宿時における水分摂取の実態を把握し、剣道の競技現場における熱中症対策を検討することを目的とした。その結果、剣道の夏期強化合宿時に行われている水分摂取は、熱中症予防という観点からは不十分であることが示唆され、改善の必要が考えられた。また、摂取率が低く体重減少率が3%を超えたものが下級生に多くみられたことから、特に下級生における水分摂取の配慮が必要と思われた。従って、以上のことを考慮した剣道における熱中症予防の水分摂取ガイドラインが必要と思われた。
6. 高温環境下における剣道稽古着と防具の着用が運動時の体温とホルモン動態に及ぼす影響	共著	1993年	体力学研究第42巻第6号p. 776	高温環境下における剣道の稽古着と防具の着用が、運動時の体温変動とホルモン動態に及ぼす影響を検討した。その結果、体重、ヘマトクリット、血清浸透圧、血漿カテコラミンの運動による変化率には、稽古着と防具の着用の有無による差は認められなかった。しかし、稽古着と防具を着用した場合の上腕及び大腿部皮膚温の変化率は、着用しなかった場合より有意に高かった。従って、高温環境下において剣道の稽古着と防具を着用すると、運動負荷によって生じた脱水の程度とホルモン動態に有意差を生じない運動でも、運動中の熱放散を阻害され、その結果、運動中の体温が上昇することが示唆された。
7. 剣道選手のコンディショニングに関する研究(Ⅱ) -試合前の夏期強化合宿時におけるコンディショニングづくり-	共著	1993年	武道館研究第26巻別冊p. 38	大学剣道選手の試合前の夏期強化合宿におけるコンディショニングづくりについて、選手群と非選手群に分類して検討した。その結果、選手群と非選手群で合宿中の総合的、体的、精神的コンディショニングの変動には差が認められなかったが、選手群は技術的コンディショニングをより早い時期に高め、合宿中それを維持していたことが示唆された。
8. 剣道選手のコンディショニングに関する研究(Ⅲ) -剣道の団体戦におけるコンディショニング評価の試み-	共著	1993年	武道館研究第26巻別冊p. 39	剣道の団体戦におけるチームコンディショニングの評価及び試合前のコンディショニングと試合成績の関係を検討した。その結果、身体的及び技術的コンディショニングには優勝時と三位時で、有意な差が認められた。チームコンディショニングに関しても優勝時と三位時で差が認められた。以上の結果から、本研究における指標を用いて剣道の団体戦でのチームのコンディショニングを評価することが可能であり、また少なくとも三位以上の試合成績には選手とチームのコンディショニングが関与している可能性が示唆された。

9. 剣道選手のコンディショニングに関する研究(Ⅳ) -心理テストを用いたコンディション評価の有用性-	共著	1994年	武道館研究第27巻別冊p. 46	剣道選手のコンディション評価におけるPOMSの有用性とそれを用いた競技現場でのコンディション管理について検討した。POMSにおける各尺度と自覚的コンディションの項目との関係についてスピアマンの相関分析を行った。その結果、いくつかの検討項目に関して有意な相関が認められた。特にPOMSにおけるVigor, Fatigue, Confusionは剣道選手の多くのコンディションの変動を反映しており、POMSを継続的に評価することで剣道選手のコンディションの変化を捉えることが可能と考えられた。
10. 剣道のコンディショニングに関する研究(V)	共著	1994年	武道館研究第27巻別冊p. 47	大学剣道選手における夏期強化合宿中のコンディションの変動を明らかにし、合宿中の健康管理について検討した。その結果、選手は夏期合宿中の後半に進むに従って体重が減少し、また疲労が蓄積されることが示された。これらのことから、暑熱環境下において稽古量が普段より増加する合宿では、特に体重減少や疲労に対する配慮が重要であり、本研究の指標を用いた選手の健康管理を行う必要があると考えられた。
11. フィットネスレベルの変動から見た剣道の寒稽古の特性	共著	1994年	武道館研究第27巻別冊p. 49	剣道独特の寒稽古前後の選手の最大酸素摂取量の変動から剣道における寒稽古の特性について検討した。その結果、寒稽古後の持久力は、寒稽古前と比較して有意に低下した。一方、寒稽古3日後に持久力が5%以上低下した選手は、寒稽古3カ月後の持久力も寒稽古前より有意に低値であった。持久力が5%未満の低下を示した選手における寒稽古3カ月後の持久力は寒稽古前と有意な差は認められなかった。これは、個々の体力を考慮しない寒稽古独特の稽古形態が原因と考えられた。
12. 高温環境下における剣道の稽古着と防具の着用が運動時の体温に及ぼす影響	共著	1994年	スポーツ産業学研究第4回学会大会号Pp. 56-59	先行研究では、重量負荷のかからない自転車エルゴメータで行った実験について、本研究では剣道の稽古着と防具を着用の重量が影響を及ぼす運動として自転車運動を実施し、運動時の体温と脱水に及ぼす影響について検討した。その結果、剣道の稽古着と防具は運動時の熱放散を阻害すると同時に、防具の重量により熱産生が増大し、著しい体温の緒上昇と脱水を生じさせることが示された。

13. 剣道選手のコンディショニングに関する研究(VI)	共著	1995年	武道館研究第28巻 別冊p. 40	大学剣道選手における試合前での稽古前と稽古中のコンディションの実態と稽古前と稽古中のコンディションの関係を男女別に明らかにした。男子選手において、稽古前のPOMSのFatigueは稽古中の疲労感、身体の出具合などと相関が認められた。一方、女子においては稽古前のPOMSにおけるVigorが整形外科的疾患と相関が認められた。従って、男子と女子選手では重視すべきPOMSの尺度が異なることが考えられた。
14. コンディションの変動から見た剣道の寒稽古の有用性	共著	1995年	武道館研究第28巻 別冊p. 41	大学剣道選手の寒稽古中のコンディションと寒稽古前後の持久力の変動から、剣道における寒稽古の特性について検討した。その結果、寒稽古中のコンディションと寒稽古後の持久力の変動には、寒稽古の稽古強度が関与していると考えられた。寒稽古を適切に行うためには、寒稽古の稽古計画と健康管理が重要であり、特にコンディション管理に配慮すべき key-dayがあると考えられた。
15. 総合型地域スポーツクラブにおけるクラブ運営の取り組み I - ふくのスポーツクラブにおける指導者研修プログラムとその効果 -	共著	2006年	身体運動文化学会第 11回大会	総合型地域スポーツクラブは、2000年に文部省からの指導の基に始まった。クラブの共通の課題としてあげられているものに「指導者の育成」がある。今回は、富山県のふくのスポーツクラブにおける指導者養成の取り組みについて、クラブの現状と課題、指導者研修プログラム実施までの経緯、指導者研修プログラムの内容と成果などについて紹介した。
16. 総合型地域スポーツクラブにおけるクラブ運営の取り組み II - ふくのスポーツクラブにおける独自スポーツテストの試み -	共著	2006年	身体運動文化学会第 11回大会	ふくのスポーツクラブでは、クラブに登録しているスポーツ少年団の指導者からの発案により、様々な競技種目の少年団小学生を対象とした独自のスポーツテストを実施した。その結果、少年団所属の小学生の情報が指導者を問わず共有化することができた。また、スポーツテストの成績を指導者間でディスカッションすることにより、トレーニング方法や指導方法などのナレッジの共有化も図ることができた。
17. 剣道指導における男女差に関する研究～大会に向けたコンディショニング事例の男女差分析～	共著	2009年	身体運動文化学会第 13回大会	これまでに指導における男女差について検討が行われていなかった剣道、なかでも試合に向けたコンディショニングとしての心理面（POMS）を中心に男女差について分析した。結果、男子においては、POMSに表れるFatigueが技術的な面やパフォーマンスに大きな影響を与えており、一方女子においては、Vigorがパフォーマンスに大きく関わっていると考えられる。

18. 剣道のイメージおよび教育効果に関する調査-テキストマイニングによる分析の試み-	共著	2014年12月	身体運動文化学会	本研究では、剣道のイメージや教育効果についてテキストマイニングによる質的分析から、剣道の固有性に関する検討資料を得ることを目的とした。結果、道と剣道以外の種目においては、「種目のイメージ」の単語頻度解析の成績に大きな差異がみられた。剣道には、礼儀、日本、武道、厳しい（頻度順）といった単語がみられ、剣道以外の種目においては、スポーツ、チーム、仲間、チームワークといった単語が多く抽出された。また特徴語抽出においても、剣道では礼儀、正しい、日本、武道、厳しい、礼の属性頻度が高く、剣道以外の競技では、スポーツ、チーム、ボール、仲間の属性頻度が高く、両者に差異が認められた。
19. 剣道における左下腿傷害に関する研究-振り向き動作における足さばき方法に着目して-	共著	2012年9月	武道学研究Vol. 45 (2012) No. Supplement	本研究では振り向き時の足さばき方法に着目し、足さばきの違いが剣道の競技力と左下腿部への負荷に与える影響について詳細を明らかにすることを目的とした。その結果、左制動では相手を目視しやすい長所がある一方、左下腿部には大きな負荷が加わりやすい。一方、右制動では左下腿部への負担は大幅に軽減できるが、振り向き動作時において相手を目視できる時間が短くなる。両方の振り向き動作の修得し、条件において使い分けが、稽古における競技力の向上や傷害の予防に繋がると考えられた。
20. 身体接触を伴うスポーツの経験が心の発育・発達に与える影響～大学アスリートに対する調査から～	共著	2017年12月	身体運動文化学会第22回大会抄録	身体接触を伴うスポーツが、心の発育・発達に与える効果を明らかにすることを目的とし、成人期を迎えた大学生を対象としてその調査を行った。その結果からは、コンタクトスポーツにおいて同情（痛み）や情動的共感の心理面に与える影響は見ることができなかった。一方で、「攻撃性」が非コンタクトスポーツよりも高い傾向にあった。
21. 身体接触を伴うスポーツの経験が□の発育・発達に与える影響	共著	2018年12月	身体運動文化学会第23回大会抄録	身体接触を伴うスポーツが、心の発育・発達に与える効果を明らかにすることを目的とし、成人期を迎えた大学生を対象とした質問紙調査による結果を分析した。結果、コンタクトスポーツは□理的に攻撃性を高める可能性はあるが、スポーツマンシップを有する場合は、相手の痛みを理解し、情動的共感を持つ可能性が示唆された。

(演奏会・展覧会等)						
1. 第44回全国教職員剣道大会	選手	2004年8月	広島廿日市市大会	5人制次鋒として出場，団体ベスト8		
2. 第15回世界剣道選手権大会	コーチ	2012年5月	イタリア（ノヴァラ）大会	日本代表トレーニングコーチとして帯同（男女団体，男女個人優勝）		
3. 第16回世界剣道選手権大会	コーチ	2015年5月	日本（東京）大会	日本女子代表トレーニングコーチとして帯同（女子団体・個人優勝）		
3. 第17回世界剣道選手権大会	コーチ	2018年9月	韓国（仁川）大会	日本女子代表トレーニングコーチとして帯同（女子団体・個人優勝）		
4. 第19回世界剣道選手権大会	コーチ	2024年6月	イタリア（ミラノ）大会	日本女子代表トレーニングコーチ（女子団体・個人優勝）		
(招待講演・基調講演)						
1.						
(受賞(学術賞等))						
1.						
研 究 活 動 項 目						
助成を受けた研究等の名称	代表， 分担等 の別	種 類	採択年度	交付・ 受入元	交付・ 受入額	概 要
(科学研究費採択)						
1.						
(競争的研究助成費獲得(科研費除く))						
1.						
(共同研究・受託研究受入れ)						
1.						
(奨学・指定寄付金受入れ)						
1.						
(学内課題研究(共同研究))						
1. 日本をめぐる文化・スポーツ交流に関する共同研究	分担者		2003-2005 年度		2,560,000 円	日本国内における戦前・中・後の剣道の発展と，剣道を通じた日米の交流について述べた．
2. 水戸市の小学生に向けた沢渡川流域の環境教育プログラムの開発	分担者		2011-2013 年度		2,854,000 円	沢渡川を取り巻く環境の実態を明らかにするため，水質や生態系を始めとした流域環境に関する調査プログラムを作成し，それを実施した．基礎調査で得られた知見をもとに，河川環境に対する意識をより多面的かつ自主的なものへと高めていく，身体と五感を使った実践的プログラムを開発・実施した．
3.						

(学内課題研究(各個研究))						
1. 対人型スポーツ種目 におけるポイント獲得のためのパターン 分析			2003年度		376,000円	高等学校総合体育大会における 剣道の試合をビデオにて撮影 し、その有効打突を得る過程の パターン分析を行った.
2.						
(知的財産(特許・実用新案等))						
1.						
2.						